

篤姫と福川本陣

会員 西村修一

海路から陸路へ

三〇周年記念号（二〇〇九年）の「史料紹介」において、二〇〇八年にNHK大河ドラマ『篤姫』の高視聴率に伴って篤姫一行御参府の陸路説が取りざたされるようになり、山陽道・東海道が通る各市町村の関連機関が陸路説の確証と足取り及び日程を明らかにしつつある様を（特に山口県を抜って）、わが周南市でも発掘された岩崎家文書の一報も添えてお伝えした。

ちなみに、原作者の宮尾登美子さん（『天璋院篤姫』／日本経済新聞夕刊に昭和五八年二月二五日〜昭和五九年五月一日連載）は、薩摩↓大坂（海路）・木曾路（中山道）。脚本家の田淵久美子さん、すなわちNHKドラマは、薩

摩↓大坂（海路）・東海道説を採用していた。脚本において田淵さんが東海道に変更したのは資料に依拠したものである。新資料から総合すれば、（薩摩（熊本）街道↓長崎街道↓山陽道↓東海道）オール陸路であった。途中、京都に寄って近衛家に挨拶をしている。

岩崎文書よりの発掘のニュースが一ヶ月も経たないうちに（二月に報道された新聞もあった）、開けて翌月の一月には、周南市では文書の公開展示及び企画展を開催していた。周南市の対応は迅速であったと思う。大河ドラマ終了直後の余韻もあつてか、県内外から多くの来館者を集めたが、その施設は暖房設備がないために非常に寒く、来館者には気の毒であった。

企画物は、学芸員及び関係者が、ドラマと並行しながら篤姫一行の日程と足取りを発掘報告してゆく苦労の様子を、タイムテーブルに沿って展示していた。一種謎解きのような面白さがあり好評だった。よって放映終了間近の一二月に資料を発表した周南市と岩国市は後ろのほうの扱いとなった。面白い企画だということで、朝日新聞がこのモチーフで特集記事を組んだ（二〇〇九年一月二六日付「篤姫の足跡探せ」／小暮純治記者）。反響があったて、関係各所で問い合わせや取材が続いた。

後で岩国藩の資料に見るように興入れ行列ではない（パレードは二年後の渋谷の藩邸から江戸城までである）。その準備のために養子縁組を見越した近衛家への挨拶を含めた江戸入りである。内々のご参府である。

私は企画展後、九州の十字路とも言える筑前の山家宿を訪れてみた。複数のお茶屋（本陣）や旅籠屋が集合する大きな宿場町だったが、それでも資料が残存したのは分宿した「松尾屋」一件のみだった。一年が過ぎて、篤姫一行の足取りが江戸まで点と線で結ばれるという期待

は淡く消え去った。九州・山口地区の資料の残存は優秀だったが、以東はそれほど期待できなかった。山口県は萩本藩と徳山藩と資料の存在が大きかった。山口県は幸運だった。

富海本陣（九日午後休憩）：『御大名様御通路控』〔該当年あり〕。福川本陣（九日宿泊）：『御奉書控帳』〔該当年欠落〕。呼坂本陣（二〇日午後休憩）：『萬日記』〔該当年ナシ〕。高森本陣（二〇日宿泊）：相川家文書未調査。各資料を見ていこう。

本陣資料と目代資料

福川本陣の資料（福田家文書）の中の参勤交代関係の記録は、表紙に『御奉書控帳』と名打たれていた。本陣福田家で通用させた題字であるが、「御奉書」とは管轄している徳山藩から出される命令書のこと、『御奉書控帳』とは福田家の当主がそれを写しとったもので、年代に沿って何代にもわたって何冊も綴じ込んだものである。福田家の資料には、驚きだが幸運なことに「御奉書」

自体が残っていた。江戸時代の貴重な史料である。手に握れるサイズ（幅一三センチ）で少しピンクがかっている。会員の杉村富志子さんは「栄谷の）杉村本家には毛利藩で使う紙を作っていた紙漉場があり（五石二人扶持）、萩本藩で使う紙の色は黄色、徳山藩のは小豆の汁で染めた赤紙でした」と報告している。紙漉（こみ）で締められ、裏返しの際に宛先人の名を記したものもある。文（ふみ）のような感じだ。薄い良質の紙に役人らしい筆致だったためであった。

御奉書には様々の大きさがあるが、街道筋に関するものはこのサイズが徳山藩では一般的だったようだ。市教委はこの手のものを百以上所蔵している。

奇怪なことに、これらの福田家からの文書資料は本陣の福田家からではなく、脇本陣の福田家から出ている。何かいささかあったようだ。しかし資料は本陣のものであり、いつからか脇本陣に運ばれたらしい。『御奉書控帳』はすでに調査済みで、文政一〇年から慶応二年まで欠落しており期待はされていなかったのだけど、古文書

研究家の丹野吾朗さんは「岩崎家文書」（『御奉書写』）の存在を知っておられ、ある程度目星をつけておられた。

岩崎家は富田古市（ふるいち）において代々目代（もだ）を務めていた。目代とは主要街道の駅には一名が置かれ、人馬駕籠などの手配通送や輸送賃の徴収の任にあたった地下役である。世襲であり、かつ自宅が目代所であった。古市は江戸後期になって山陽道より外れたが、古くより良港として知られ、交通の要衝だった。山崎八幡宮の参道もまっすぐ古市港に延び、浜近くの第一の鳥居の近くに岩崎家はあった。

岩崎家は昭和四〇年代まで醬油屋を営んでいたが、やめて解体するとき、表具店「清芳堂」の店主の原竹男さんが表具の下張りにするために文書類（もんじょ）を段ボール一杯分持って帰った。当時新南陽市の文化財審議委員をしていた原さんの中にあつた文書類を重要な史料ではないかと直感し、新南陽市の社会教育指導員だった原田義明さんに連絡して確保されるに至った（平成五年頃）。岩崎家文書は不思議な命脈を保ったものである。

岩崎家の系譜を載せておこう。

四代 岩崎良吉義清（三代 岩崎良吉賢義長男）文化六年二月一〇日生く明治六年七月七日没（享年六六歳）

此の代に至り酢味噌醬油ノ醸造販費ヲ営ム。味噌醸造ハ天保十三年（一八四二）創ムト言ヒ傳フ。

五代 岩崎榮造（次男。大正二年没。酒醸造を始める）

六代 岩崎一郎（長男昭和一年没。味噌の輸出、甘酒の缶詰製造輸出を始める。町会議員三選。富田町名誉公民）

英語学者の民平は義清の孫である。岩崎家は富田では「富田味噌」のブランドで知られていた。周南市民俗展示室にて「富田味噌」商標入りの樽・小皿・タオルを展示している。該当の嘉永六年の「御奉書」を写したのは義清である。

『御奉書写』（嘉永六年正月く一二月ノ岩崎家文書）

「薩摩中将様御娘 御参府として

来ル九日 宮市御昼休 同晩福川町御泊

翌十日 花岡御昼休ニ而 御領内御通路被成候条

一人足廿三人 馬七疋 富田新町

一人足拾九人 同古市町

内拾人八日ニ差出、福川より申参り候付

一人足十七人 同平野町

但右之人馬 来ル九日夕七ツ時 福川町人馬所へ

才料相添差出之 花岡迄 相動可申事

九月五日 三吉 族」

「薩摩中将」とは養父である島津家（徳川幕府外様七七万石）一代藩主^{なりあき}斉彬（正四位上・薩摩守、左近衛中将。死去後に贈従一位・権中納言）のことである。

島津のお姫様が江戸に参られることになり、九月九日に福川の本陣にお泊りになられる予定だから、富田の各町は以下のものを供出せよという目代への命令書である。

江戸の前期までは、福川―平野―古市―音羽橋の海岸線沿いの古市経由が参勤交代のコースだったが、後期になつて山崎八幡宮の門前町のほうが栄えるようになって

て、新町經由で参勤交代するようになった。目代所は新町、古市、平野の各町にあったものと思われるが、古市は陶氏の富田保の時代より富田の中心であるし、古株の古市の目代所のみは御奉書が送付されて各町に回したのか、三通出されたのかは判らない。「うち一〇人は前日によこしてほしい」と福川が言ってきたと、古市町だけに要請しているのは注意を要する。距離としては平野町が一番近い。

人足の催促は、新町二三人、古市一九人、平野町一七人だから、各町の趨勢が予想できる。やはり新町に勢いがある。まず馬が新町から要請されているのは、山崎八幡宮の馬場と関係があるのだろうか。文久年間の頃から流鏑馬神事などが奨励されていた。行列の規模が大きくなれば農耕馬も含めて各町から供出されるはずですと丹野さんは言う。

福川町の人馬所に、才料（監督）を添えて差し出して花岡までのお勤めをするようにと命令している。荷物を花岡まで先送りしておくとは丹野さんにご教示頂いた。

島津斉彬の嘉永五年と嘉永七年の参勤の行程の記録が残るが、宮市発ちのときは花岡泊りになり、福川は昼休みとなる。周南地域で宿泊に使われるのは宮市、福川、花岡であり、富海や呼坂は半宿（休憩）となる。

三吉族（やから？）は、一五〇石扶持の中堅クラスの徳山藩士（馬廻うままわり）で、一の井手の興元寺に奈古屋家と並んで子孫の墓がある。

「 覚

一 蒲団 三拾枚 夜着 貳枚 富田新町

一 座 拾枚 居風呂 貳本

一 蒲団 貳拾五枚 夜着 貳枚 同古市町

一 座 八枚 居風呂 壹本

一 同断 同平野町

右 薩摩中将様御娘 御参府として

来ル九日 福川町御泊二而 御通路二付

前書通り 御借被仰附候条 来ル八日夕方迄二

彼町目代所へ 無相違 可被差出候 以上

九月五日 木村保太夫

「薩摩中将様御娘が江戸へ行かれるため、来る九日福川町に御泊りになる。通行のために、前に書いた通り（物品を）借りると仰せになったので、来る八日夕方までに福川町目代所へ間違ひなく差し出すこと。以上」（防府市教育委員会 軼雅子訳）

同じ日に徳山藩より出されている「覚書」で、物品の差出しについてのものである。この二人の役人は他の箇所にも現れ、三吉の方が重要な書類を扱っているので、木村保太夫は三吉より下位の役人である。「夜着」とは今の掛け蒲団にあたるものである。形は現在の四角い蒲団とは異なり、むしろ着物に近く衿や袖がつき綿が入っている。「据風呂」は江戸では鉄砲風呂（鉄、銅製の筒を桶のなかに入れて火を焚くもの）が一般的で、京坂では五右衛門風呂と呼ばれる釜風呂であるが、丹野さんはお湯だけを入れる桶風呂と言われる。

九日に到着なのに、五日に通達とはあり得ない急な話

である。本来は一ヶ月くらい前より先方の藩より通達が来るのが普通である。毛利家文庫の「諸記録綴込」の嘉永六年九月分の記録に関係がありそうだが、九月一日付で宿泊地・休息地の変更がなされている（本来、福川泊は十日の予定だった）。私の推測では、同様の御奉書（指令書）が以前に出ていたものと思われる。日にちが変更されただけで、内容にはほとんど変わりが無いので、岩崎義清は最終的なもののみ記録に残したものと思われる。

石川家文書と岩国藩の資料

『大名様御通路控』（富海本陣／石川家文書）

「九月九日 小郡 宮市 福川

薩州御姫君 御宿礼金二百足

右受取え「御茶代」と書候處、「御宿札」と書直候様申

候事也

米 七升

小皿 香物

吸物 豆腐 あみ魚 干

平皿 竹輪 こんにやく 切こんぶ

右、侍分十五人前入用 八丸拾四匁有之

福川のお隣の徳山藩の富海の本陣(石川家)は半宿で、参勤交代関係ではほとんどが休憩に使われている。役人レベルの小人数なら泊りが可能である。『御大名様御通路控』は御奉書の控えや写しではなく、当主が参勤交代に関して綴った記録である。篤姫一行の記載の載る『御大名様御通路控』(嘉永四年〜安政三年)の筆を執ったのは石川澄之進忠昌(文化元年一二月一七日〜明治三年八月一日没)である。

放映の年の九月に、防府市文化財郷土資料館の「富海を通った天璋院篤姫」コーナーで、早速、防府市教委の輛雅子さんより展示紹介されていた。

全体に目を通すと、献立記載は忠昌さんの趣向であることが分るとのこと、料理のレシピに興味をお持ちのようだ。小郡発ち福川着は三七・五キロメートルあり、大名行列はしつかり歩いていたことが分る。「山陽道を歩

こう会」の弁当持ちの一日行程はこの四分の一である。

忠昌さんは面白いことを書いている。金二百疋(四方円程度)を頂き、「御茶代」と書き渡したところ、「御宿礼」と書き直すよう言われたという。出張費のやりくりなのか、薩摩流の流儀なのか。山鹿市の善行寺での休息時(八月二九日)も、住職は「御宿礼」と記録簿に記している。

一汁一菜(香物||漬物は数えない)はシンプルな食事の代名詞である。本陣は侍一五人分の給仕をしたとある。午後三時ごろの中途半端な時間帯で、二六〇名という所帯で一五人という人数は不可解。おそらく昼休の宮市で給仕などの仕事をし、食べられなかった侍たちだろう。それにしても一人当たり五合の計算になるから、参勤交代は腹が減るのかと思ってしまうのだが、白米山盛りは江戸時代では最高のもてなしとされる。

八丸拾四匁はちまるの「八丸」とはびた錢に八〇文を紐に通して「一さし」百文で通用させたもので(「防長歴史用語辞典」)、一さし||銀一匁で換算したものか。ネットでは「一

さし一々千円程度」とある。一五人分の給仕の礼金程度のものだ。

海路再考

今回報告された発掘された文書の中では、岩国の資料が目を見張った。

『岩邑年代記』(九)

「嘉永六年九月十一日、薩州姫君様、昨夜高森泊にて、今日大橋廻り。児玉屋え御小休。今晚久波御泊の由。横山乗越え、町奉行今田七右衛門、手子藤村十兵衛、御案内御使者、有之侯に付き、御客屋え御使・内坂左門。御同勢沢山。此度公儀之御興入と申評判」

『岩邑年代記』(岩国徴古館発行)は岩国藩士が藩と近郊の出来事を綴ったものだが、錦帯橋そばで小休止したことや、篤姫のお嫁入りが町で評判になっていたことが記されている。これは、逆に篤姫一行のご参府が「興入れ」というオフィシャルな前提ではなかったことを意味

している。ところが、民間に泊めてもらう者が多いから、漏えいして評判になったと推理するのがよからう。

岩国藩内の出来事などを記録した『御用所日記』の嘉永六年九月十一日の記述は一種の驚きである。

〔概略〕篤姫様が岩国を通行するときに、ぜひ橋を見物したいと玖珂から使者を遣わしてきた。岩国側は「六橋(錦帯橋)は破損している部分もあり、急なことで掃除等も行き届かないため、通行はお断りします」と応答した。しかし、篤姫は再び使者を通じて「近年主人(薩摩中将様)が通行したときには許可を出している。先例にならって許可を出せないのか」と尋ねてくる。岩国の役人は「それならば、船でお渡りください」と使者に伝えた。その後、御蔵元(藩の役所)には次のとおり報告が上がった。「お姫様が橋に押しかけられ、いろいろお断りしたのですが、押し切つて御通行されました」(岩国徴古館による)

余談だが、後日譚があつて、許可を出して渡つたということとして手打ちとなつた。しかし、薩摩七十万石(加

賀九〇万石に次ぐ大藩)を向こうに回した堂々とした渡り合いはどうしたことか。岩国は將軍家與入れの情報はつかんでいたはずである。萩本藩への氣遣いはなかったのだろうか。篤姫が通過する直前(嘉永六年八月)に佐波郡との「郡境碑」を新しくつくりなおした徳山藩とは好対照だ。萩本藩にうとまれ独立にも失敗し対立し続けた岩国(藩への昇格は慶応四年)と、万役山事件でとんでもない代償を払った徳山との違いかもしれない。これは伊能忠敬が周南を訪れた時も同じ態度だった。

ここで注目したいのは、篤姫行列の進行コースを篤姫自身が決めていることである。これは驚きである。作家の宮尾登美子は総責任者に向井新兵衛という侍を登場させて仕切らせている。この設定は常識的で納得できる。岡山県の矢掛宿の資料の名簿に彼の名前を見つけることができる(この資料よりだいたい二六〇名の規模と推定できる。一五万石クラスの大名行列に匹敵する)。三河では東海道の浜名湖の「今切の渡し」を渡らずに、篤姫は行列と分かれて北回りの「姫街道」を選んでいる。勝手

気ままなコース取り、おそらく五代までの藩主の菩提のある感応寺へ墓参りを希望したのも篤姫の意向であろう。まるで藩主(代理?)の氣取りである。

原作者の宮尾登美子は五〇人規模の小隊をイメージし、すみやかに與入れの下ごしらえである京都入りの行程として大阪までの海路を想定したことはすこぶる常識的な歴史的考察といえる。今まで誰も彼女の肩を持った者はいなかった。NHKドラマの時代考証を担当した原口泉氏でさえ「海路は危険なルートで、嫁入りとなればなお海路は考えにくい」と後出しジャンケンのようなコメントをしている。むしろ海路はお伊勢参りも庶民が利用したポピュラーな手段で、大量輸送もきき安上がりである。

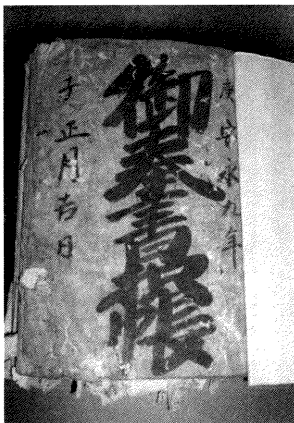


写真1 「御奉書控帳」(福田家文書)

なぜ斉彬は参勤交代でもないのに金のかかる陸路を選択指示したのか。しかも一五万石クラスの大名行列仕立てである。それに総指揮はどうも一九歳の篤姫自身のようなので大名設定である。何か斉彬には考えがあったようだ。

参勤交代の目的の一つに外様大名により金を使わずことにあるのは諸大名も十分承知である。斉彬は参勤交代に諸国見聞という重要な目的を見ていた。斉彬が將軍家へ嫁ぐわが娘の手向けに、何を一番の贈り物にしようとしたかわかったような気がした。

※「徳山藩」「山陽道」は通称でとおさせて頂いた。

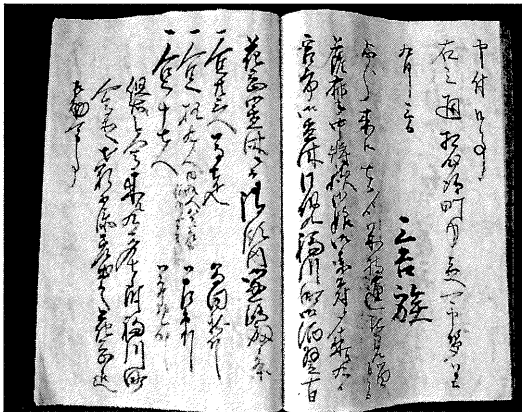


写真3 「御奉書」(篤姫記載の部分)

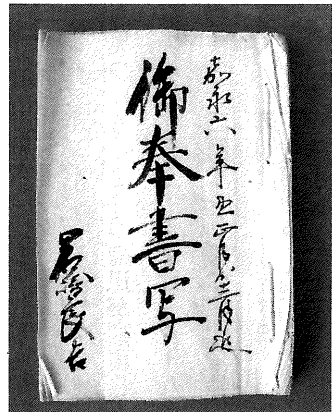


写真2 「御奉書」(岩崎家文書)

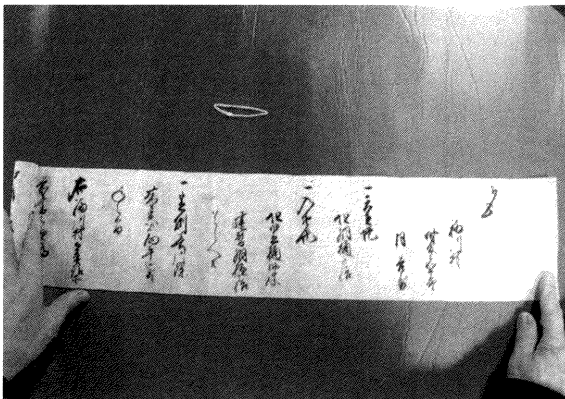


写真5 御奉書(徳山藩役人の筆致)

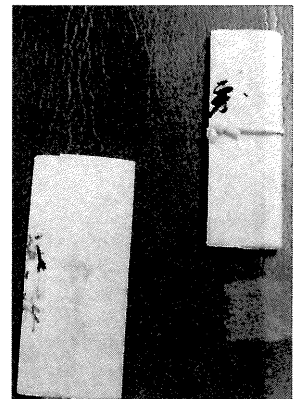


写真4 徳山藩の御奉書